ゲルマン語強変化動詞第2種の歴史的変遷（3）[84]

下嵜　正利

2.6. 低地ドイツ語

本稿では，中低ドイツ語については専ら北部低地ドイツ語方言を，新低ドイツ語についてはその中の北低地ザクセン方言を扱うこととする。

中低ドイツ語では，古ザクセン語の iu は û[85]となる。開音節において，古ザクセン語の u と o は，非常に開口度の高い ō へ[86]，ü は，非常に開口度の高い ō̈ へと変化する。

古ザクセン語の io – ô – u – o というアプラウトは，中低ドイツ語では ê – ô – ō – ō となる。直説法現在1人称単数形では，幹母音が複数形と同じ ê となる。直説法現在2・3人称単数形では，語尾の母音が脱落した場合，幹母音の短母音化が起こる（û > ü）。命令法単数形の幹母音は，ê と û の両方が見られる。

このパターンのアプラウトを示す動詞には，次のものがある。

bêden, drêgen, drêpen, vlêgen, vlên, vlêten, vrêsen, gêten, kêsen, krêpen, lêgen, forlêsen, nêten, sêden, schêten, tên, vordrêten

古ザクセン語に見られた動詞の内，次のものは失われている。

driosan, griotan, hioƀan, hliotan, klioƀan, liodan

逆に，次の動詞は，中低ドイツ語期になってから文献に現れるようになったものである。

vlêgen, vrêsen, krêpen, sêden

krêpen には krûpen という別形がある（下記参照のこと）。また，drêgen には drōgen，lêgen には lōgen という別形があるが，drōgen, lōgen は名詞から派生し

---

[84]「ゲルマン語強変化動詞第2種の歴史的変遷（1）」は『山口大学独仏文学第43号』（2021），「ゲルマン語強変化動詞第2種の歴史的変遷（2）」は『山口大学独仏文学第44号』（2022）所収。

[85] 中低ドイツ語の長母音の表記に当たっては，ゲルマン祖語の長母音あるいは二重母音に由来するものには ^ を，開音節における短母音の長母音化により生じたものには ¯ を付すこととする。ê と ô には，開口度の低いものと開口度の高いものの2種類があり，強変化動詞第2種の現在語幹の ê は開口度が低く，過去単数語幹の ô は開口度が高い。ē, ō は，開口度の高い ê, ô よりも更に開口度が高い。

[86] 古ザクセン語の o に由来する ō は，15世紀から a で綴られるようになる。

た形態である。

vlên, tên では0～g[87]，vrêsen, forlêsen では s～r という文法的交替が見られる。ただし，vlên, tên では，文法的交替の平均化が一部起こっており，vlên の直説法過去1・3人称単数形には本来の vlô と並んで vlôch という形態も存在している。tên の直説法過去1・3人称単数形では，tôch という形態しか見られない。

w の前では，母音変化が特殊で，語幹が w で終わる動詞のアプラウトはû/û/ou – ou – ou – ou/û となった。語幹がwで終わる強変化動詞第2種は，brouwen, rûwen, drouwen の3語のみである。どれも弱変化もし，そちらの方が普通になっている。drouwen は古ザクセン語の文献には見られない動詞である。blûwen は完全に弱変化に移行している。

アオリスト現在形を持つ動詞は，アプラウトが û – ô – ō – ō となる。次の動詞があげられる。

bûgen, dûken, krûpen, lûken（schließen）, rûken, schûven, slûken, slûpen, slûten, sprûten, stûven, sûgen, sûpen

直説法現在2・3人称単数形では，ウムラウトした形としていない形の両方が存在している。古ザクセン語で見られた動詞の内，hrūtan は失われている。brûken は弱変化に移行している[88]。逆に，次の動詞は中低ドイツ語期になってから文献に現れるようになったものである。

dûken, krûpen, rûken, schûven, slûken, slûpen, stûven, sûpen

強変化動詞の過去複数語幹を持つ形態では，本来，直説法複数形ではウムラウトしていない幹母音，それ以外はウムラウトをした幹母音という分布であったが，14世紀になると，すべてウムラウトした母音で統一されるようになる（第2種の場合は ō̄）。

中低ドイツ語の開口度の低い ê は，現在 e(e) [εi] になっている。中低ドイツ語期，過去単数語幹の幹母音 ô と過去複数語幹の幹母音 ō̄ との間には開口度の違いがあったが，新低ドイツ語期になると，開口度が過去単数語幹の ô の方に揃えられ，ō̄ の舌の位置が上がり，ô̄ となる。新低ドイツ語では，過去単数語幹が過去複数語幹が用いられていた所でも用いられるようになり，また逆に，過去複数語幹が過去単数語幹が用いられていた所でも用いられるようになる

[87] 中低ドイツ語で，h は母音間及び長母音の後の語末で脱落する。Lasch（1974），§226，§350，§351を参照のこと。語末の g は無声化し，たいてい ch と綴られる。同書 §340を参照のこと。

[88] 古ザクセン語の brūkan は „genießen“，中低ドイツ語の brûken は „nötig haben, gebrauchen“ という意味で，変化が生じている。

が，その結果，過去形のすべての人称・数において，ウムラウトしていない母音とウムラウトしている母音の両方が用いられることとなった[89]。現在，ô は o(o) [ou]，ô は ö(ö) [öy] となっている。中低ドイツ語の ō は，現在 a [ɔ:] であるが，ただし r の前では舌の位置が上がり，o [ou] となっている。

現在，標準階梯の現在語幹を持つ動詞の内，次の動詞は e(e) [εi] – o (o) [ou]/ö(ö) [öy] – a [ɔ:] というアプラウトを示している[90]。

beden（bieten), bedregen（betrügen), flegen, fleten, geten, legen, geneten, scheten, tehn, verdreten

直説法現在2・3人称単数形では，幹母音は ü [ʏ] である。命令法単数形の幹母音は，ee である。tehn では文法的交替が見られる（tehn – toog/töög – tagen)。

中低ドイツ語に見られた動詞の内，drêpen, vlên[91], kêsen は失われている。sêden は，saden という過去分詞と Seedpunkt という名詞の中に現在語幹を残すのみとなっている。krepen は，まだ存在はしているものの，このグループからは外れている[92]。

freren と verleren は，e(e) [εi] – o(o) [ou] / ö(ö) [öy] – o [ou] というアプラウトを行う。文法的交替がほぼ r の方で平均化されているが，直説法現在2・3人称単数形においては freren が du freerst/früst, he freert/früst，verleren が du verleerst/verlüst, he verleert/verlüst という変化形になり，語幹末子音が s のものと r のものが併存している。また freren には fresen という不定詞もまだ残っている。

語幹が w で終わっていた動詞は，broen/bruen 以外失われている。broen/bruen は，完全に弱変化に移行している。

アオリスト現在形を持つ強変化動詞第2種は，現在次のものがある。

krupen, rüken, schruven, schuven, sluken, sluten/slüten, snuven, stuven, sugen, supen

中低ドイツ語に見られた lûken（schließen), slûpen, sprûten は失われている。duken は弱変化に移行している。schruven は，中低ドイツ語では弱変化である。snuven も，中低ドイツ語期から見られた動詞であるが，中低ドイツ語期，強変

---

[89] 方言によっては，過去単数語幹と過去複数語幹の区別が保持されている。例えば，ミュンスターラント方言では，ruken 以外の強変化動詞第2種の過去単数語幹の幹母音は au，過去複数語幹の幹母音は üö である。

[90] 強変化動詞の活用に関しては，文献により相違が見られる。本稿の記述は主として SASS Plattdeutsche Grammatik に基づいている。

[91] vlên は弱変化動詞の flüchten によって取って代わられている。

[92] krepen は強変化第5種へと移行し，krepen – kreep – krepen と活用する。

化であったかどうか不明である。

krupen, schruven, schuven, stuven, supen は u(u) [uː] – o(o) [ou]/ö(ö) [öy] – a [ɔː] というアプラウトを行い，直説法現在2・3人称単数形の幹母音は ü [ʏ]，命令法単数形の幹母音は uu [uː] である。stuven の過去分詞には，stoort/stöört という別形も存在している。

snuven と sugen も同様のアプラウトを行い，命令法単数形の幹母音も uu [uː] であるが，直説法現在2・3人称単数形の幹母音として ü [ʏ] と並んで u [ʊ] も用いられている。

sluten/slüten は，現在語幹を持つすべての変化形において，ウムラウトをしている幹母音とウムラウトをしていない幹母音の両方を持つ。従って，アプラウトのパターンは u(u) [uː]/ü(ü) [yː] – o(o) [ou]/ö(ö) [öy] – a [ɔː] となり，直説法現在2・3人称単数形の幹母音は u [ʊ]/ü [ʏ]，命令法単数形の幹母音は uu [uː]/üü [yː] である。

rüken は，現在語幹においてウムラウトした幹母音しか現れない。従って，アプラウトのパターンは ü(ü) [yː] – o(o) [ou]/ö(ö) [öy] – a [ɔː] となり，命令法単数形の幹母音は üü [yː] である。rüken は弱変化もする。そのため，直説法現在2・3人称単数形の幹母音として ü [ʏ] と üü [yː] の両方が現れる。

sluken には，slucken という別形も存在している。sluken は弱変化をするようになっているが，過去形には強変化形も残されている[93]。強変化の過去形には，slook, slöök という形の外，sluuk, sluck という形も見られる。

bögen と stöven は，過去形の幹母音が o(o) [ou]/ö(ö) [öy]，過去分詞の幹母音が a [ɔː] であるが，現在語幹の幹母音が e(e) [εi] でも u(u) [uː] でもなく，ö(ö) [öy] である。これは，使役動詞との混淆によるものである。直説法現在2・3人称単数形の幹母音は，bögen が öö [öy]，stöven が ö [œ]/ü [ʏ] である。命令法単数形の幹母音は，どちらの動詞も öö [öy] である。bögen の過去分詞には，böögt という弱変化形も見られる。

低地ドイツ語では現在，他のクラスの強変化動詞や不規則変化動詞の中にも，過去形と過去分詞において，強変化動詞第2種と同様の幹母音を持つものがある。

次の強変化動詞は，過去形の幹母音が o(o) [ou]/ö(ö) [öy]，過去分詞の幹母音が a [ɔː] である。

第4種　breken, befehlen[94], nehmen[95]

[93] SAAS Plattdeutsches Wörterbuch では，過去形は強変化形のみとされている。また，過去分詞は，弱変化形と並んで slaken という強変化形が残されているとされている。

[94] befehlen は本来，強変化動詞第3種であったが，すでに中低ドイツ語において第4種へと移行している。

[95] nehmen の過去形には，nehm という形態も存在している。

第5種 dregen[96], wegen
第6種 drapen[97], graven, slan/slagen

この他，弱変化動詞の fragen も，過去形に幹母音が o(o) [ou]/ö(ö) [öy] の強変化の別形を持っている。

強変化動詞第6種の swören は，freren, verleren と同様，過去形の幹母音が o(o) [ou]/ö(ö) [öy]，過去分詞の幹母音が o [ou] である。語幹が r で終わっているが，過去分詞の o [ou] は freren, verlerern とは異なり，強変化動詞第4種への類推によるものである[98]。

強変化動詞第4種の kamen と強変化動詞第7種の laten, slapen は，過去形で e(e) [εi] と並んで ö(ö) [öy]，過去分詞で a [ɔ:] という幹母音を示す。

強変化動詞第5種の steken は，過去形で e(e) [εi] と並んで o [ou]，過去分詞で e(e) [εi] と並んで a [ɔ:] という幹母音を示す。

強変化動詞第7種の lopen, ropen は，過去形で e(e) [εi] と並んで ö(ö) [öy] という幹母音を示す。過去分詞の幹母音は o [ou] であるが，これは現在形の幹母音と同様で，lopen の場合は中低ドイツ語の開口度の高い ô (< germ. au)，ropen の場合は中低ドイツ語の開口度の低い ô (<germ. ō) に由来するものである。

古ザクセン語の dugan は第2種の過去現在動詞であったが，中低ドイツ語の dōgen は弱変化に移行している。現在，dögen は不規則な変化を示しており，過去形が doog/dögg，過去分詞が dagen/döggt で，強変化動詞第2種に非常に近い幹母音を示している。

2.7. オランダ語

古期オランダ語では，germ. eu は，次音節に前舌・後舌高母音あるいは j がある時，もしくは直後に w が続く時 iu に，それ以外の場合 eo を経，io になった。germ. au は，直後に w が続く時を除き，ô[99]になった。過去分詞は接尾辞が -an- であり，a- ウムラウトにより幹母音は，直後に w が続く時を除き，o になった。i- ウムラウトは，非前舌の短母音に対してのみ起こり，長母音は i- ウ

[96] dregen は本来，強変化動詞第6種である。dregen という形はすでに中低ドイツにおいて，dragen と並んで用いられていた。

[97] drapen は drepen の別形である。drepen は，強変化動詞第5種の変化をする。

[98] swören は，中低ドイツ語では sweren（古ザクセン語で swerian）であり，語幹形態の類似性から強変化動詞第4種への類推が働いている。過去分詞の o という幹母音は，すでに古ザクセン語において見ることが出来る。Gallée ([3]1993)，§ 396, Anm. 2及び Lasch (1974)，§ 430, Anm. 4を参照のこと。

[99] 中期オランダ語の記述においても，母音のみを表記する場合には，ゲルマン祖語の長母音あるいは二重母音に由来する長母音には ^ を，開音節における短母音の長母音化により生じた長母音には ¯ を付することとする。中低ドイツ語と異なり，ê と ô はそれぞれ1種類のみである。ē, ō はやはり ê, ô よりも開口度が高い。

ムラウトを受けなかった。

中期オランダ語では，古期オランダ語の io が ie [iə] に，û [u:] が û [y:] になった。また，中期オランダ語では開音節の短母音が長母音化するが，その際，舌の位置が低下した。古期オランダ語の開音節における u と o は，w の前にある時を除き，共に ô < germ. au よりも開口度の高い ō になった。w の前では，iu 及び u は ou/û [y:][100]になった。ゲルマン祖語の au は，w の前にある時，中期オランダ語で ou になった。屈折の際に見られた i- ウムラウトは，排除された。現在形においては，古期オランダ語で見られた iu と io の交替が平均化され，ie で統一された。

中期オランダ語において，標準階梯の現在語幹を持ち語幹が w で終わっていない強変化動詞第2種のアプラウトは，ie – ô – ō – ō となるが，このアプラウトを行う動詞には次のものがあった。

> bieden, bieghen, bedrieghen, vlieghen, vlieten, vriesen, ghieten, kiesen, clieven, criepen, lieghen, verliesen, ghenieten, rieken, sieden, scieten, smieken, tien, verdrieten

bieghen, clieven, criepen, rieken, smieken においては，アオリスト現在形も見られる。

vriesen, kiesen, verliesen においては s [s, z]～r，tien においては0/ch～gh という文法的交替が見られる。ただし前者においては，文法的交替が平均化している例も見られる。

vlien も tien と同様，語幹が germ. h で終わる強変化動詞第2種で，実際，直説法過去1・3人称単数形 vlooch，直説法過去1・3人称複数形 vloghen，過去分詞 ghevloghen という tien と同様の形態も残されてはいるが，これらの形態が用いられるのはまれである。直説法過去1・3人称単数形は，germ. h の脱落した vloo という形態が最も使われている[101]。過去複数語幹と過去分詞の語幹においては，高地ドイツ語と同様に，vlieghen との混同を避けるために文法的交替がたいてい排除される。母音間の h は脱落するので，過去複数語幹を持つ形態と過去分詞で母音連続が生じる。この母音連続は，次の4通りの形で解消されていく。

1. 幹母音と語尾の母音が融合し，二重母音 oe になる。
2. 渡り音として w が母音間に生じる。この場合，w の影響で幹母音は ou/û

[100] ou と û の違いは，方言的なものである。なおここでは，u から生じた [y:] も û で示している。
[101] 中期オランダ語において，germ. h は，語末において保持されていることもあれば脱落していることもある。

に変化する。こうして生じた ou は，一部過去単数語幹にも入り込んでいく。

3. 母音間に d が挿入される。この d は，一部過去単数語幹にも入り込んでいく。
4. 過去単数語幹と同様に ô を幹母音とし，語尾・接尾辞の母音を持たない形態（vloon, ghevloon）が形成される。

この結果，vlien は，過去単数形，過去複数形，過去分詞それぞれに様々な形態が並存することとなる。

vlien – vlooch/vlo/vlau/vloot – vloghen/vloen/vlouwen/vluwen/vloden/vloon
– ghevloghen/ghevloen/ghevlouwen/ghevluwen/ghevloden/ghevloon

中期オランダ語において，語幹が w に終わる強変化動詞第2種には次のものがある。

blouwen/bluwen, brouwen/bruwen, rouwen/ruwen[102]

幹母音は，現在語幹，過去複数語幹，過去分詞で ou/û である。過去単数語幹では ou しか見られない。弱変化動詞の louwen も，時折強変化第2種の変化を示すことがある。

アオリスト現在形を持つ動詞のアプラウトは，û – ô – ō – ō となる。このアプラウトを示す動詞には，次のものがある。

bughen, drupen, duken, cluven, cruden, crupen, luken, ontpluken, ruken, ruten, scruven, scuven, slupen, sluten, smuken, spruten, stupen, stuven, sughen, supen

既に述べたように，bughen, cluven, crupen, ruken, smuken には，標準階梯の現在語幹を持つ形態も存在している。

spiën/spouwen/spuwen は，本来強変化第1種であるが，語幹末の w の影響による母音変化あるいはその w の脱落，更に他の動詞に対する類推等により，各語幹が様々な形態を併せ持つようになり，その中には強変化第2種と同様の幹母音を持つものもある。

spiën/spuwen/spouwen – speu/spau/spooch/speech

[102] rouwen/ruwen は，強変化第7種の houwen への類推で，rieu, rieuwen という過去形を示すこともある。

– spuwen/spouwen/spoghen/spiwen
– ghespuwen/ghespouwen/ghespoghen/ghespeghen

各形態の成立過程については，本稿では省略する[103]。

新オランダ語では，中期オランダ語の ie [iə] は ie /iː/ [i, iˑ] に，û [yː] は，w の前にある時を除き，ui [œʏ] になる。w の前では û [yː] は u（u）/yː/ [y, yˑ] で，二重母音化しない。ô と ō は融合し，o（o）/oː/ [oˑ] となる。ô と ō の融合により，過去単数語幹と過去複数語幹・過去分詞の語幹の間の母音の差異が失われる。また，過去形では文法的交替の平均化も加わり，統一語幹が形成される。

現在 ie – o（o）– o というアプラウトを示す動詞には，次のものがある。

bieden, bedriegen, vliegen, vlieden, vlieten, vriezen, gieten, kiezen, klieven（klieben）, liegen, verliezen, genieten, rieken, schieten, verdrieten

klieven は弱変化もする。中期オランダ語においてアオリスト現在形と並んで見られた bieghen, criepen, smieken は失われている。

中期オランダ語の vlien は，vlieden となっている。これは，初め過去複数語幹と過去分詞の語幹の末尾に生じた d が他の語幹にも広がったことにより形成されたものであるが，すべての語幹が d で終わるようになったことにより，他の動詞と同様の語幹形成を行い，活用に変則的な点の無い動詞になっている。

vriezen と verliezen では，現在語幹で z, s，過去語幹と過去分詞の語幹で r という文法的交替が見られる。kiezen では，文法的交替が失われ，語幹末子音が z, s で統一されている。しかしながら，verkiezen では，過去形及び過去分詞の語幹末に z, s と r の両方が見られる[104]。

語幹が w 以外の子音で終わり標準階梯の現在語幹を持つ強変化動詞第2種であったものの中には，変則的な活用をするようになったものもある。zieden は，過去分詞は強変化形であるが，過去形は弱変化となっている。中期オランダ語の tien は，強変化動詞第1種の tiën と融合し，現在 tijgen – toog – getogen という変化となっている[105]。文法的交替は，g の方で統一されている。

語幹が w に終わる動詞で現在まで残されているのは，後述の spuwen を除くと，brouwen のみである。中期オランダ語に見られた blouwen/bluwen, rouwen/ruwen, louwen は失われている。brouwen は，過去分詞は現在でも強変化（gebrouwen）であるが，過去形は弱変化になっている。

アオリスト現在形を持つ動詞のアプラウトは，新オランダ語では ui – o（o）–

[103] これについては，下嵜（2020）, 62-63頁を参照のこと。
[104] 過去形はふつう verkoos で，verkoor は古形である。
[105] これについては，下嵜（2020）, 64頁を参照のこと。

o となる。このアプラウトを示す動詞には，次のものがある。

buigen, druipen, duiken, fluiten, kluiven（nagen）, kruipen, ontluiken, pluizen, ruiken, schuiven, schuilen, sluiken, sluipen, sluiten,（smuiken）, snuiven, snuiten, spruiten, spuiten, stuiven, zuigen, zuipen, wuiven

pluizen においては，文法的交替は見られない。pluizen[106], schuilen, snuiven[107], wuiven は弱変化もする。smuiken は方言的語彙である。この他，弱変化動詞の fuiven も，戯れに強変化させられることがある。

中期オランダ語に見られた語の内，cluven, ontpluken, ruten, scruven, stupen は失われている。kruien（< cruden）は弱変化に移行している。逆に，次の動詞は，新オランダ語期になってから文献に現れるようになったか，もしくは本来弱変化動詞だったのが強変化第2種に移行したものである。

fluiten, pluizen, schuilen, sluiken, snuiven, snuiten, spuiten, wuiven

中低オランダ語の spiën/spuwen/spouwen からは，現在 spugen と spuwen という2つの同義の動詞が生まれている。spuwen は弱変化である。spugen は強弱両変化をし，強変化の場合は spugen – spoog – gespogen と活用する。現在語幹の u は spuwen の影響によるものと考えられる。

（高地）ドイツ語や低地ドイツ語と同様，オランダ語でも，数は少ないが，過去形と過去分詞において，強変化動詞第2種と同じ幹母音を示す第2種以外の強変化動詞が存在している。

第4種　scheren（scheren, rasieren）[108], zweren（schwären, eitern）[109]
第5種　bewegen, wegen

このようなアプラウトを行うに至った過程については，本稿では省略する。

2.8. 英語

直後に w, g が続く場合を除き，古英語の ēa は中英語では [ɛ:] に，古英語の ēo は [ø:] を経て [e:] になる。古英語における ēaw という音連続は中英語では

[106] pluizen は，„pflücken, austüfteln“ の意味の時は強変化，„abfasern“ の意味の時は弱変化である。
[107] snuiven は，„schnauben, schnobern“ の意味の時は強変化である。„Schnupftabak od. Kokain gebrauchen“ の意味の時は弱変化であるが，過去形に強変化形も持つ。
[108] „streifen“ の意味の scheren は弱変化で，語源的つながりは無い。
[109] zweren（schwären, eitern）は弱変化もする。„schwören“ の意味の zweren は強変化動詞第6種で，語源的つながりは無い。

[ɛu] となる。古英語の ēow は [eu] を経て [iu] になる。後期古英語において，g の前で ēa, ēo は単純母音化するが（ēa, ēo > ē），これにより g の口蓋化が起こる。中英語になると，この ēġ は [ei] となり，母音の直前にある時はここから更に [iː] に，それ以外の場合には [ai] へと変化していく。

古英語の o は，開音節において，g の前にある時を除き，[ɔː] となった。古英語の og は [ɔu] となったが，時代が下ると [ɔː] になった。

古英語の ūg と ug は，中英語でともに [uː] となった。

古英語に見られた強変化動詞第2種の内，次のものは中英語では見られなくなっている[110]。

> brēotan[111], -brēoþan, dūfan, ġēopan, hlēotan, -hnēopan, hrēodan, hrūtan, cnēodan, lēon, lēodan, -nēopan, nēotan, rēodan, rēofan, rēotan, sēon, slūpan[112], snēowan, strūdan, sūgan[113], þēotan/ þūtan, þrēotan, wrēon

brūken, cheuen, rēken, smēken は，残されてはいるものの，弱変化へと移行している。smūgen は，中英語の初期に現在形の用例が見られるのみで，弱変化であったか強変化であったかは不明である[114]。

中英語では，標準階梯の現在語幹を持ち，語幹が germ. g, germ. h, germ. w 以外に終わる強変化動詞第2種のアプラウトは，[eː] – [ɛː] – [u] – [ɔː] となる。このアプラウトを示す動詞には，次のものがる。

> bēden, drēpen, drēsen, flēten, frēsen, ȝēten, grēten（weinen）, rēsen, chēsen, clēven, crēpen, -lēsen, sēthen, schēten

直説法現在2・3人称単数形では，幹母音の変化はほぼ失われており，[eː] が用いられる。過去複数語幹では，時代が下ると，本来の [u] に代わり，過去分詞の幹母音 [ɔː] が用いられた例も見られるようになり，[ɔː] は更に過去単数語幹に入り込むこともあった。

drēsen, frēsen, rēsen, chēsen, -lēsen, sēthen では，文法的交替が保持されている。ただし，chēsen では，s が過去複数形や過去分詞に入り込んでいる例も見られる。

chēsen と schēten は，現在語幹の幹母音が [oː] のこともある。後期古英語以

---

[110] lēon, sēon, wrēon は，強変化第1種から移行してきた動詞である。
[111] brēotan は brēken < brecan によって置き換えられている。
[112] slūpan は中低ドイツ語からの借用語 slippen により取って代わられている。
[113] sūken < sūkan の方は残されている。
[114] smūen という形は残されていない。

降，下降二重母音が上昇二重母音になる現象が時折見られるようになるが，この変化で ēo は ĕō になる。この ĕō は，子音の後では ĕ を失い ō となるが，この発展の結果形成されたのが chōsen, schōten という形態である。

標準階梯の現在語幹を持ち，語幹が germ. w で終わっていた強変化動詞第2種としては，中英語では breuen と reuen が見られるが，ともに過去単数語幹を持つ形態が残されており，その幹母音は [ɛu] である。

標準階梯の現在語幹を持ち，語幹が germ. g に終わっていた強変化動詞第2種は，drīen, flīen, līen の3語が見られる。アプラウトは [iː] – [ei, ai] – [uː] – [ou] となる。flīen と līen の過去単数語幹には幹母音が [iː] のものも存在しているが，これは，過去単数語幹の幹母音の [ei] が過去複数語幹へと入り込み [iː] へと変化した後，再び過去単数語幹に取り入れられたものである。flīen の過去単数・複数語幹には更に幹母音が [eu] のものがあるが，これは，強変化動詞第7種の内，現在語幹の幹母音が ou のものの過去分詞が -ouen で，flīen の過去分詞 flouen と同様であるため類推が働き，それらの動詞の過去単数・複数語幹の幹母音が取り入れられたものである。flīen においてはまた，flēn との混同により，本来 flēn の変化形であるものが flīen の変化形として用いられることがある。

語幹末子音が germ. h であった強変化動詞第2種には，flēn, tēn（zeihen）, tēn（ziehen）, thēn がある[115]。音韻法則に則ったアプラウトは，[eː] – [ɛː] – [uː] – [ou] である。flēn は flīen との混同が起こっていたが，これを避けるため，flēn は弱変化へと移行していく[116]（下記参照のこと）。tēn（zeihen）は，不定詞と現在形しか残されていない[117]。tēn（ziehen）は，過去単数形で幹母音が [ei, ai], [iː] のこともある。flēn, tēn（ziehen）, thēn では，文法的交替が見られる。

中英語においてアオリスト現在形を持つ強変化動詞第2種のアプラウトは，語幹が germ. g で終わっていた būen 以外，[uː] – [ɛː] – [u] – [ɔː] となる。このアプラウトを示す動詞には次のものがある。

crūden, lūken（schließen）, lūken（jäten）, lūten, schūven, sprūten, sūken, sūpen

būen は [uː] – [ei, ai] – [uː] – [ɔu] というアプラウトとなった。アオリスト現在形を持つ強変化動詞第2種の直説法現在2・3人称単数形においては，ウムラウトは行われなくなっている。

中英語で見られる強変化動詞第2種の内，次のものは弱変化も示している。

---

[115] tēn（zeihen）と thēn は，強変化第1種から移行してきた動詞である。
[116] 現在，flee は flēn 本来の意味しか持っていないが，fly は flīen と flēn の意味を併せ持っている。
[117] 現在形は，直説法2人称単数形の tixste と直説法3人称単数形の tiʒth が残されている。

breuen, būen, drīen, flēn, flēten, frēsen, grēten（weinen）[118], lūken（schließen）, reuen, chēsen, crēpen, crūden, līen, lūten, rēken, sēthen, schēten, schūven, sprūten, sūpen

この内，次のものは弱変化の方が普通である。

breuen, būen, flēn, flēten, reuen, crēpen, līen, lūten, rēken, sēthen, schēten, sprūten, sūpen

近代英語では，大母音推移により中英語の [iː] が [ai] に，[eː] が [iː] に，[uː] が [au] に，[oː] が [uː] に，[ɔː] が [oː] を経て [ou] になる。中英語の [eu] は [juː] となったが，複数子音の後では [j] が脱落し [uː] となった。

次にあげる中英語期に見られた強変化動詞第2種の内，あるものは既に中英語期において，あるものは近代英語期に入ってから失われている[119]。

bēden, drīen, drēpen, drēsen, ȝēten, grēten（weinen）[120], rēsen, -lēsen, lūken（schließen）, lūken（jäten）, smēken, smūgen, sūken, tēn（zeihen）, tēn（ziehen）, thēn

また，中英語において強弱両変化を示していた動詞の内，弱変化が普通であったものは，近代英語では完全に弱変化になっている[121]。更に，crowd と shove[122] も弱変化へ移行している。

強変化動詞第2種に由来する動詞で，現在なお強変化を示している動詞は，fly, freeze, choose, cleave（spalten）[123]の4語のみである。cleave（spalten）は弱変化もする[124]。

現在語幹の幹母音は，どの動詞も中英語のそれから規則的に発展したものである。choose は，中英語 chēsen の別形 chōsen に由来している。fly の過去

---

[118] grēten（weinen）の過去分詞は，弱変化形しか残されていない。

[119] この内，drēpen は drop < droppen < dropian 及び drip < drippen により，dūven は dive < dīven < dȳfan により，-lēsen は lose < lōsen < losian により，lūken（schließen）は lock < loken により，smēken は smoke < smōken < smocian により，sūken は suck により置き換えられている。

[120] greet < grēten < grēotan は，greet – grat – grutten と活用した。このアプラウトは，強変化第2種に由来するものではない。

[121] shoot は中英語 schēten の別形 schōten に由来している。

[122] 中英語の ū は，v の前では近代英語で ū > u > ʌ と変化する。

[123] 弱変化（規則変化）の cleave（kleben）も，同音異義語の cleave（spalten）の影響で，かつて過去形に clove という強変化の別形を持っていた。

[124] cleave（spalten）の弱変化形には，cleft – cleft という不規則変化形と cleaved – cleaved という規則変化形がある。

形の幹母音 [uː] は，強変化第7種から入り込んだ [eu] に由来している。freeze, choose, cleave の過去形の幹母音はどれも [ou] であるが，これは過去分詞から過去複数語幹に入り込んだ [ɔː] に由来している。過去分詞の幹母音はすべての動詞で [ɔː], [ɔu] から発展した [ou] である。また過去分詞では，すべての動詞で接尾辞の -(e)n が保持されている。

freeze と choose において，文法的交替は排除され，現在語幹と過去単数語幹に由来する [z] で統一されている。また choose においては，語頭音も現在語幹と過去単数語幹のものであった [tʃ] で統一されている。

2.9. 西フリジア語

古フリジア語の [aː] は，古フリジア語末期に [ɛː] となり，現代西フリジア語では [ɪə] へと変化している。古フリジア語の [jaː] は，古フリジア語末期に [jɛː] となる。この [jɛː] は，l, m の後にある場合は，[j] が脱落し [ɪə] へと変化することがあった。この変化を被らなかった [jɛː] は，[jɪə] や [jɛ] になることもあったが，大抵は [jeː] を経，[iə] または [jɪ] になった。[iə] は，軟口蓋音の前にある場合には更に [iː] へと変化した。

古フリジア語の [uː] は，無声子音，鼻音，l，次音節に属す有声閉鎖音の前で [u] または [y] になった。[uːw] < [uːv] は，母音の前では [ow]，語末では [ou]，子音の前では [ou, oː] となった。

skj は sj /sj/ [ʃ]，tj は tsj /tj/ [tʃ] になった。古西フリジア語において，母音間の d の脱落が起こるようになったが，語末の d も長母音の後で脱落するようになる。

古フリジア語で見られた標準階梯の現在語幹を持つ強変化動詞第2種の内，driāpa, fliāta, (h)riouwa, kriāpa[125], riāka[126], wiāka は失われている。brouwe は弱変化へ移行している。古フリジア語においては fliāga と fliā の融合が見られたが，„fliehen“ の意味の時は弱変化第2種の flechtsje が用いられるようになる。

現在，西フリジア語において見られる標準階梯の現在語幹を持つ強変化動詞第2種には，次のものがある。frieze は，古フリジア語の文献には見られなかった動詞である。geniete については，下記を参照のこと。

biede, bedrage, fleane, frieze, jitte, kieze, lige, ferlieze, (geniete), siede, sjitte, tsjen

[125] アオリスト現在形を持つ krûpe は残されている。下記を参照のこと。

[126] riāka の現在語幹は，古フリジア語では標準階梯のものしか見られないが，現在残されている rûke はアオリスト現在形を持つ。古フリジア語の riāka は „rauchen“ という意味だが，現在の rûke は „riechen“ という意味で，意味に変化が生じている。古フリジア語には „riechen“ という意味の rūkia という弱変化動詞が存在していたが，rûke の形態と意味の変化には，この rūkia が関与している可能性がある。

現在人称変化においては，fleane, tsjen 以外，2・3人称単数形でも不定詞と同じ幹母音が現れる。過去形の幹母音は，geniete 以外，過去単数語幹の幹母音 ā に由来する ea [ɪə] である。

これらの動詞はどれもそれぞれ何らかの点で特殊な変化をしているため，一語ずつ個別に説明していくことにする。なお，西フリジア語では，動詞間で類推が働き，活用に変化が生じることがあるが，そうした事例にはその都度触れていく。

・biede – bea – bean

現在語幹では語幹末の d が保持されているが，過去形，過去分詞では脱落している。過去分詞の幹母音 ea は，d の脱落の後の約音により生じたものである[127]。強変化動詞第5種の biddе は，bidde – bea/bidde – bean/bidden と活用するが，bea という過去形は，過去分詞 bean が biede のそれと同形のため類推的に形成されたものと考えられる。

・bedrage – bedreach/bedroech – bedreagen/bedragen

bedrage においては，古フリジア語の driāga と draga/drega が混淆している。この混淆は，すでに古西フリジア語において起こっており，bi- という接頭辞が付く場合，*bidriāga という形態は見られず，bidraga/bidrega という形態しか見られない。bedreach – bedreagen は driāga 由来，bedroech – bedragen は draga/drega 由来である。bedreagen という過去分詞は，bedreach という過去形の幹母音が入り込んだものである[128]。

・fleane – fleach – flein

不定詞の fleane は fliā を引き継いでおり，第2不定詞の語尾の後に更に第1不定詞の語尾が付加され形成されたものである。fleane は次のような現在人称変化をする。

ik fljoch/flean, do fljochst, hy fljocht, wy fljogge/fleane

1人称単数形の fljoch，複数形の fljogge は，2人称単数形 fljochst，3人称単数形 fljocht を基に形成されたものである。1人称単数形の flean，複数形の fleane は，不定詞の fleane から形成されたものである。

---

[127] 過去複数形は beaen であるが，この形態は過去分詞と同様に，d の脱落と約音が起こった後，過去複数語尾 -en が再構築されたという発展も全く考えられなくはないが，それよりもむしろ過去単数形に過去複数の語尾が付いたものと考えた方がよかろう。

[128] 現在，drage の過去分詞は，過去形の幹母音が入り込み，droegen という形をしている。

文法的交替の痕跡が認められるが，ゲルマン祖語の g が本来の箇所で保持されているのは，過去複数形（fleagen）のみである。

・frieze – frear – ferzen [ˈfɛːzn]

frieze の過去形 frear では，幹母音は過去単数語幹に由来するものの，語幹末子音は文法的交替を示しており，過去複数語幹に由来している。過去分詞では文法的交替が排除されている。過去分詞では音位転換が起こっており，それにより r が z の前に位置することとなり，r が脱落するに至っている。歯音の前での r の脱落の際には，普通代償延長は起こらないが，ferzen では例外的に長母音が現れている[129]。

・jitte – geat – getten/jitten

現在語幹では，古フリジア語の iā が ji となっている。過去分詞に jitten という別形が見られるが，これは hjitte に対する類推によるものであろう。強変化第5種の ferjitte は，ferjitte – fergeat – fergetten/ferjitten という jitte と全く同じ活用をするが，jitte の影響があることは明らかである。

・kieze – keas – keazen

過去分詞の幹母音 ea は，過去形の幹母音が入り込んだものである。語幹末では文法的交替が排除され，s, z で統一されている。また語頭音も k で統一されている。

・lige – leach/liigde – leagen/liigd/lygd

弱変化形が併存している。過去分詞の幹母音 ea は，過去形の幹母音が入り込んだものである。

・ferlieze – ferlear – ferlern [fəˈlɛn]

文法的交替が残っている。過去形は，幹母音は過去単数形に由来するのに対し，語幹末子音は過去複数語幹に由来している。過去分詞では接尾辞のあいまい母音の脱落により r が n の直前に来ることになり，それにより r が脱落している。

・geniete – genoat – genoaten[130]

過去形と過去分詞の幹母音が oa [oə] であるが，これは古フリジア語の ā とも e ともつながらない。ge- という接頭辞を持っていることからして，geniete

[129] ferzen の他，bern, gers でも [ɛː] が現れる。

[130] geniete には，genietsje という弱変化の別形が併存している。

は古フリジア語の niāta を継承するものではなく，オランダ語の genieten を借用したものと考えるべきであろう。oa という幹母音は，中期オランダ語の [ɔ:] が取り入れられ発展したものであろう[131]。

・siede – sea/sear – sean

biede と同様の発展であるが，siede の場合，過去形において d が脱落せず r に弱化するにとどまっている sear という別形が存在している。

・sjitte – skeat – sketten

sjitte の場合，現在語幹において古フリジア語の iā が ji になっており，そのため現在語幹の語頭音が sj [ʃ] となり，過去形，過去分詞の語頭音との間に差異が生じている。強変化動詞第5種の mjitte は mjitte – meat – metten と活用するが，これは過去分詞が同じ -eten という形であったことから sjitte に対する類推が働き，このようになったものと考えられる。

・tsjen – teach – tein

tsjen は，語幹が母音で終わる1音節語のため，第2不定詞が第1不定詞としても用いられている。古西フリジア語末期の [jɛ:] が [jɛ] に変化している。[j] の影響で現在語幹の語頭音が tsj [tʃ] となり，過去形，過去分詞の語頭音との間に差異が生じている。tsjen は次のような現在人称変化を行う。

ik tsjoch, do tsjochst, hy tsjocht, wy tsjogge

2・3人称単数形を基に1人称単数形と複数形が形成されている。文法的交替については，fleane と同様である。

古フリジア語に見られたアオリスト現在形を持つ強変化動詞第2種の内，hrūta, -lūka（schließen）は失われている。

アオリスト現在形を持つ強変化動詞第2種であったものの内，現在見られるのは次のものである。

brûke, dûke, glûpe, krûpe, lûke（ziehen）, rûke, skowe, slûpe, slute, sprute, strûpe, stowe, sûpe

rûke, slûpe, strûpe, stowe, sûpe は，近代西フリジア語になってから文献に現れる

[131] 古西フリジア語の [ɔ:] は，歯音の前では oa [oə] へと変化することが多い。

ようになった動詞である[132]。

brûke と sprute は弱変化へ移行している[133]。lûke（ziehen）を除く他の動詞は，弱変化形と強変化形が混在している。lûke（ziehen）は強変化形しか持たない。現在人称変化の際，母音の変化は無い。

語幹が k, p で終わる dûke, glûpe, krûpe, lûke（ziehen）, rûke, slûpe, strûpe, sûpe は，現在語幹の幹母音が û [u] である。lûke（ziehen）は lûke – loek/luts – lutsen と活用する。luts, lutsen の u [ø] は，語幹が k に終わる強変化動詞の過去形・過去分詞において語幹末子音が ts になっている時に現れる母音である[134]。lûke 以外の動詞は，弱変化の過去形・過去分詞の他[135]，幹母音が oe [u:] の強変化過去形を持っている。この oe [u:] は，古フリジア語の ā とも e ともつながらない。

語幹が t に終わる slute は，現在語幹の幹母音が u [y] である[136]。slute は，古フリジア語のアプラウトを引き継ぐ sleat という強変化過去形，sletten という強変化過去分詞を持つが，弱変化もする[137]。更に，sluet という過去形も存在しているが，この ue [yə] という幹母音は出所不明である。

語幹が -ūv > -ūw に終わっていた skowe と stowe は，弱変化の skode – skood, stode – stood という過去形，過去分詞を持つが，過去形には skau, stau という強変化の別形がある。au [ɔu] という幹母音は，āw からの発展形である可能性が考えられるが，そうだとすると，過去単数語幹の幹母音と過去複数語幹の語幹末子音の組み合わせということになる。

3. 最後に

本稿を締めくくるにあたり，全体を俯瞰しいくつか述べてみたい。

各言語の文献時代の初期において，強変化動詞第2種が何語見られるか見てみると，以下の通りである[138]。

ゴート語　20	古アイスランド語　38	古スウェーデン語　39
古高ドイツ語　46	古ザクセン語　27	古英語　60
古フリジア語　28		

[132] rûke については，註126を参照のこと。

[133] sprute の過去分詞は，接尾辞が本来強変化動詞のものである -en である（spruten）。

[134] -uts という過去形と -utsen という過去分詞を持つ動詞には他に，brekke, dekke, rekke, sprekke, stekke, strike, trekke があげられる。berekke, strekke, wreke では，-utsen という過去分詞は見られるが，-uts という過去形は見られない。

[135] krûpe と slûpe の弱変化過去分詞には，接尾辞が -t のものと -en のものがある。

[136] 弱変化へ移行した sprute も，現在語幹の幹母音が u [y] である。

[137] slute の弱変化過去分詞は，接尾辞が -en である。

[138] 数え方により，多少の差は生じてくる。また，ここでは派生による語数の増加は加算していない。

この時点で既に言語によりかなりの差が認められる。文献上の制約によるところもあるであろうが，それだけではないだろう。

部分的にでも強変化動詞第2種のアプラウトを引き継いでいれば数に入れるという前提で，各言語のその後の動詞数の変動を見てみると，ここでも言語により大きな差があることが分かる。

アイスランド語では，動詞の入れ替わりが小さく，現在でも35語見られる。スウェーデン語でも，動詞の入れ替わりが多少あるものの，現在35語で，語数はさほど減っていない。デンマーク語では現在，強変化第2種のアプラウトを残している動詞は23語で，古スウェーデン語と比べてみるとかなり数が少ない。bokmål も25語で，デンマーク語とほぼ同じである。nynorsk では27語見られるが，古アイスランド語と比べるとかなり数を減らしており，bokmål とほぼ同数である。中高ドイツ語では，強変化第2種のアプラウトを残している動詞は54語で，古高ドイツ語期よりも増えているが，現在では再び数を減らし，32語となっている。低地ドイツ語は，高地ドイツ語と比べ動詞数は少ないが，同じような増減の跡を辿っており，中低ドイツ語では古ザクセン語よりも多い32語が見られ，現在では再び数を減らし22語となっている。オランダ語では，動詞の入れ替わりはあるものの，中期オランダ語で45語であったのが現在42語で，総数はほとんど変化していない。英語では，当該動詞数の減少が著しく，古英語期，古ゲルマン語中最多の60語もの強変化動詞第2種が存在していたが，中英語で32語まで減り，現在では僅か4語が強変化第2種のアプラウトの痕跡を残しているに過ぎない。西フリジア語では，部分的にでも古フリジア語の強変化第2種のアプラウトを引きついている動詞は13語で，古フリジア語と比べると半減している。英語ほどではないが，少ない数である。

かつての強変化動詞第2種が，現在どの程度一体性や規則性を保っているか，あるいは逆に失っているかも，言語により大きく異なっている。

アイスランド語では，標準階梯の現在語幹を持つ動詞が，現在語幹で jó という幹母音を持つものと jú という幹母音を持つものに二分されるが，どちらの母音になるかは，古アイスランド語以来変わらず，後続子音により決定される。

スウェーデン語では，現在語幹の幹母音が u の動詞と y の動詞がある。現在語幹が u のグループは，古スウェーデン語において，標準階梯の現在語幹を持ち現在語幹の幹母音が iū の動詞と，アオリスト現在形を持つ動詞が融合して形成されたものである。また，現在語幹の幹母音が u の動詞にも y の動詞にも，過去分詞が弱変化形のものがあるが，どの動詞が該当するかは，音環境からは特定できない。

デンマーク語では，アオリスト現在形を持っていた強変化動詞第2種は，全て弱変化へ移行するか語彙そのものが消失している。標準階梯の現在語幹を持

つ強変化動詞第2種は，現在5つのグループに分かれている。語幹子音と各グループにはつながりがあるものの，語幹末子音からどれか1つのグループへ帰属を特定することは出来ない。

bokmål における標準階梯の現在語幹を持つ動詞については，デンマーク語と同様の状態である。アオリスト現在形を持つ強変化動詞第2種だったものについても，デンマーク語とほぼ同様であるが，弱変化に移行したものの，まだ過去形に強変化の別形を持つものがある。

nynorsk では，古ノルウェー語において2つのグループに分かれていた標準階梯の現在語幹を持つ強変化動詞第2種が統合され，1グループとなっている。このグループの不定詞の幹母音は y であるが，いくつかの動詞は jo, ju を伴う別形を持っている。アオリスト現在形を持つ動詞も含め，現在形の幹母音は，すべての動詞で y である。

ドイツ語では，標準階梯の現在語幹を持つ強変化動詞第2種であったものの1部の現在語幹が名詞から派生した形態に置き換わり，現在語幹の幹母音が ie ではなく ü [y:] になっている。過去形と過去分詞では幹母音が同一となり，[ɔ] か [o:] のどちらかが現れる。どちらになるかは，語幹末子音でほとんどの場合特定できるが，過去形と過去分詞の語幹末子音が t の場合は，両方のケースがある。過去形と過去分詞の幹母音が [ɔ] または [o:] の動詞は，強変化第2種以外にもかなりあり，このことは，ドイツ語の強変化動詞第2種の輪郭を不明瞭なものにしている。

低地ドイツ語では，標準階梯の現在語幹を持つ強変化動詞第2種の現在語幹の幹母音は e(e) [εi] であるが，bögen と stöven では，使役動詞との混淆により，現在語幹の幹母音が ö(ö) [öy] となっている。アオリスト現在形を持つ動詞では，不定詞の幹母音がウムラウトしていない u(u) のものと，ウムラウトした ü(ü) のものと，両方の形態が並存しているものがある。語幹が g, p, v で終わっている場合，ウムラウトしていない不定詞しか見られないが，これによりウムラウトと音環境の間に関連があると断定できるかどうかは難しい。過去形の幹母音は，すべての動詞で o(o) [ou]/ö(ö) [öy] である[139]。過去分詞の幹母音は，語幹が r で終わっていない場合 a [ɔ:]，r で終わっている場合 o [ou] である。低地ドイツ語でも，過去形と過去分詞の幹母音が強変化動詞第2種と共通している動詞がかなりの数見られ，やはり強変化動詞第2種の輪郭が不明瞭となっている。

オランダ語では，brouwen が語幹末の w の影響により，spugen が音韻変化に類推的変化が加わった複雑な変化により，tijgen が tiën と tien の融合により現在語幹で特殊な幹母音を示している。過去形と過去分詞は，brouwen を除き，

[139] sluken については，4頁を参照のこと。

幹母音が o(o) [o:] である。ただし zieden は，過去形が弱変化である。brouwen は，過去形が弱変化で，過去分詞が gebrouwen である。過去形と過去分詞の幹母音が共に o(o) [o:] になるアプラウトは，強変化第2種以外にも若干見られる。ドイツ語や低地ドイツ語ほどではないにせよ，やはり強変化第2種の輪郭がやや不明瞭になっている。

英語では，cleave と freeze が同一のアプラウトを示しており，choose とも過去形と過去分詞の幹母音が同一ではあるが，かつての強変化動詞第2種の内，現在でも強変化をしているものが1つの語形変化上のまとまりを成しているとは言えず，不規則変化という扱いしかできない。

西フリジア語においても，部分的にでも古フリジア語の強変化動詞第2種のアプラウトを継承していると考えられる動詞の多くが，過去形の幹母音が ea であるという共通性を示してはいるものの，それらを1つのまとまった語形変化上のグループと見ることはやはりできない。

文法的交替は，どの言語でも排除する方向で発展してきており，現在，スウェーデン語，デンマーク語，ノルウェー語，英語では見られなくなっている。

「ゲルマン語強変化動詞第2種の歴史的変遷（1）」に対する訂正

49頁，6-7行目

訂正前

ノルド祖語においては，eu と iu の分布は次音節の音によっていたが，古アイスランド語では，……

訂正後

古アイスランド語では，……

56頁，21行目

訂正前

……, slūtan#, sūgan, -sprūtan

訂正後

……, slūtan#, -sprūtan, sūgan

60頁，1-3行目

訂正前

古フリジア語の強変化動詞第2種では，germ. g が語頭にあり直後に幹母音が続く例は存在していないので，問題となるのは，germ. g が語幹末にある語の過去分詞のみである。この場合，……

訂正後

語頭の germ. g が現在語幹の幹母音 iā, iu/io の直前で口蓋化した場合，j と iā, iu/io の i の融合が起こる。この変化が見られるのは iāta の1語のみである。語幹末子音が germ. g の動詞の過去分詞では，……

「ゲルマン語強変化動詞第2種の歴史的変遷（2）」に対する訂正

62頁，14行目

訂正前

fly（fliehen）は fly – flydde – flydd とう変化,

訂正後

fly（fliehen）は fly – flydde – flydd という変化,

参考文献

（Haugen（1974 [1965]）と SASS Plattdeutsches Wörterbuch 以外の現代語辞典は省略。）

Allan, Robin, Philip Holmes and Tom Lundskær-Nielsen 1995: Danish, a comprehensive grammar, London and New York, Routledge.

Árnason, Kristján 2011: The Phonology of Icelandic and Faroese, Oxford University Press.

Baugh, Albert C. and Thomas Cable 2002: A history of the English language, fifth edition, London and New York, Routledge.

Benecke, Georg Friedrich, Wilhelm Müller u. Friedrich Zarncke 1990: Mittelhochdeutsches Wörterbuch, 3 Bde., Nachdruck der Ausgabe Leipzig 1854-1866, Stuttgart.

Bosworth, Joseph and T. Northcote Toller [11]1991: An Anglo-Saxon dictionary, Oxford University Press.

Boutkan, Dirk and Sjoerd Michiel Siebinga 2005: Old Frisian etymological dictionary, Leiden.

Braune, Wilhelm [15]2004: Althochdeutsche Grammatik 1, Laut- und Formenlehre, bearb. von Ingo Reiffenstein, Tübingen.

- [20]2004: Gotische Grammatik, neu bearbeitet von Frank Heidermanns, Tübingen.

Bremmer Jr., Rolf H. 2009: An introduction to Old Frisian, Amdterdam/Philadelphia.

Brunner, Karl [3]1965: Altenglische Grammatik, Tübingen.

- 2010 [1960]: Die englische Sprache, ihre geschichtliche Entwicklung, 1. Band, 2., überarbeitete Auflage, Tübingen.
- 1951: Die englische Sprache, ihre geschichtliche Entwicklung, 2. Band, Halle（Saale）.
- 2018 [1967]: Abriß der mittelenglischen Grammatik, 6., unveränderte Auflage, Tübingen.

Burrow, J.A. and Thorlac Turville-Petre 2005: A book of Middle English, third edition, Blackwell publishing.

Campbell, Alistair 2003 [[3]1968]: Old English grammar, Oxford.

Cleasby, Richard and Gudbrand Vigfusson 1993 [[2]1957]: An Icelandic-English dictionary, second edition with a supplement by William A. Craigie, Oxford.

Cordes, Gerhard 1973: Altniederdeutsches Elementarbuch, mit einem Kapitel „Syntaktisches“ von Ferdinand Holthausen, Heidelberg.

Cordes, Gerhard u. Dieter Möhn（Hrg.）1983: Handbuch zur niederdeutschen Sprach- und Literaturwissenschaft, Berlin.

Dammers, Ulf, Walter Hoffmann u. Hans-Joachim Solms 1998: Grammatik des Frühneuhochdeutschen, 4. Band, Heidelberg.

Deutsches Wörterbuch von Jacob und Wilhelm Grimm, 33 Bde, Nachdruck der Erstausgabe, 1984 [1854-1984], München.

Donaldson, Bruce 1997: Dutch, a comprehensive grammar, London and New York, Routledge.

Duden Bd. 7, das Herkunftswörterbuch, 5. neu bearbeitete Auflage, 2013 Berlin/Mannheim/Zürich.

Einarsson, Stefán 1973: Icelandic, Baltimore and London, The Johns Hopkins University Press.

Feist, Sigmund [3]1939: Vergleichendes Wörterbuch der gotischen Sprache, mit Einschluß des Krimgotischen und sonstiger zerstreuter Überreste des Gotischen, Leiden.

Franck, Johannes 1883: Mittelniederländische Grammatik, Leipzig.

Fulk, R.D. 2018: A comparative grammar of the early Germanic languages, Amsterdam/Philadelphia.

Gallée, Johan Hendrik [3]1993: Altsächsische Grammatik, Tübingen.

Goossens, Jan 1974: Historische Phonologie des Niederländischen, Tübingen.

Goossens, Jan（Hrg.）1983: Niederdeutsch, Sprache und Literatur, eine Einführung, 2., verbesserte und um einen bibliographischen Nachtrag erweiterte Auflage, Neumünster.

Grosse, Rudolf（Hrg.）2007: Althochdeutsches Wörterbuch, Reprint der Bände I-IV, Berlin.

Gutenbrunner, Siegfried 1951: Historische Laut- und Formenlehre des Altisländischen, Heidelberg.

Haeseryn, W., K. Romijn, G. Geerts, J. de Rooij en M. C. van den Toorn 1997: Algemene nederlandse spraakkunst, Band 1, tweede, geheel herziene druk, Groningen/Deurne.

Hansen, Aage 1962: Den lydlige udvikling i dansk, fra ca. 1300 til nutiden 1, vokalismen, København.

- 1971: Den lydlige udvikling i dansk, fra ca. 1300 til nutiden 2, konsonantismen, København.

Haugen, Einar 1974 [1965]: Norsk engelsk ordbok, nytt amerikansk opplag med tillegg og rettelser, University of Wisconsin press.

- 1982: Scandinavian language structures, a comparative historical survey, Tübingen.

Heusler, Andreas [7]1967: Altisländisches Elementarbuch, Heidelberg.

Hirt, Hermann 1931: Handbuch des Urgermanischen, Teil I, Laut- und Akzentlehre, Heidelberg.
- 1932: Handbuch des Urgermanischen, Teil II, Stammbildungs- und Flexionslehre, Heidelberg.
Hoekstra, Jarich F. 2001: An outline history of West Frisian, in: Handbuch des Friesischen, herausgegeben von Horst Haider Munske, Tübingen.
Hofmann, Dietrich u. Anne Tjerk Popkema 2008: Altfriesisches Handwörterbuch, unter Mitwirkung von Gisela Hofmann, Heidelberg.
Holmes, Philip and Hans-Olav Enger 2018: Norwegian, a comprehensive grammar, London and New York, Routledge.
Holmes, Philip and Ian Hinchliffe 2003: Swedish, a comprehensive grammar, second edition, London and New York, Routledge.
Holthausen, Ferdinand [3]1974: Altengliches etymologisches Wörterbuch, Heidelberg.
Holthausen, Ferdinand u. Dietrich Hofmann 1985: Altfriesisches Wörterbuch, zweite, verbesserte Auflage, Heidelberg.
van Kerckvoorde, Colette M. 1993: An introduction to Middle Dutch, Berlin/New York.
Kluge, Friedrich [24]2002: Etymologisches Wörterbuch der deutschen Sprache, bearbeitet von Elmar Seebold, Berlin/New York.
Köbler, Gerhard 1989: Gotisches Wörterbuch, Leiden.
- 1993: Wörterbuch des althochdeutschen Sprachschatzes, Paderborn.
König, Ekkehard and Johan van der Auwera (Ed.) 1994: The Germnic lanuages, London and New York, Routledge.
Krahe, Hans [2]1967: Historische Laut- und Formenlehre des Gotischen, bearbeitet von Elmar Seebold, Heidelberg.
- [7]1969a: Germanische Sprachwissenschaft I, bearb. von Wolfgang Meid, Berlin.
- [7]1969b: Germanische Sprachwissenschaft II, bearb. von Wolfgang Meid, Berlin.
Krause, Wolfgang [3]1968: Handbuch des Gotischen, München.
- 1971: Die Sprache der urnordischen Runeninschriften, Heidelberg.
Kress, Bruno 1982: Isländische Grammatik, Leipzig, VEB Verlag Enzyklopädie (Lizenzausgabe des Max Hueber Verlages, München).
Kurath, Hans et al. (ed.) [3]1969-2001: Middle English dictionary, University of Michigan.
Lasch, Agathe 1974: Mittelniederdeutsche Grammatik, 2., unveränderte Auflage, Tübingen.
Lehmann, Winfred P. 1986: A Gothic etymological dictionary, Leiden.
Lexer, Matthias 1992: Mittelhochdeutsches Handwörterbuch, 3 Bde., Nachdruck der Ausgabe Leipzig 1872-1878, Stuttgart

Lindow, Wolfgang, Dieter Möhn, Hermann Niebaum, Dieter Stellmacher, Hans Taubken u. Jan Wirrer 1998: Niederdeutsche Grammatik, Leer.

Lübben, August 1970 [1882]: Mittelniederdeutsche Grammatik, Osnabrück.

- 1989 [1888]: Mittelniederdeutsches Handwörterbuch, nach dem Tode des Verfassers vollendet von Christoph Walther, Darmstadt.

Mitchell, Bruce and Fred C. Robinson 2001: A guide to Old English, sixth edition, Blackwell Publishing.

Mossé, Fernand 1969 [^{2}1956]: Manuel de la langue gotique, Paris.

- 1991 [1952]: A handbook of Middle English, translated by James A. Walker, tenth printing, London.

Noreen, Adolf 1904: Altnordische Grammatik II, altschwedische Grammatik, mit Einschluß des Altgutnischen, Halle.

- ^{5}1970: Altnordische Grammatik I, Tübingen.

The Oxford English dictionary, edited by James A.H. Murray et al., 12 vols. and suppl., 1978 [1933] Oxford.

Paul, Hermann 1968 [1916]: Deutsche Grammatik, Band I, Tübingen.

- 1968 [1917]: Deutsche Grammatik, Band II, Tübingen.

- ^{23}1989: Mittelhochdeutsche Grammatik, neu bearbeitet von Peter Wiehl und Siegfried Grosse, Tübingen.

Pétursson, Magnús 1978: Isländisch, Hamburg, Helmut Buske Verlag.

Pfeifer, Wolfgang u.a. 1989: Etymologisches Wörterbuch des Deutschen, Berlin.

Popkema, Jan 2018: Grammatica Fries, tweede druk, Leeuwarden.

Prokosch, Eduard 1939: A comparative Germanic grammar, Linguistic society of America.

Ranke, Friedrich u. Dietrich Hofmann ^{4}1979: Altnordisches Elementarbuch, Berlin/New York.

Reichmann, Oskar und Klaus-Peter Wegera（Hrsg.）1993: Frühneuhochdeutsche Grammatik von Robert Peter Ebert, Oskar Reichmann, Hans-Joachim Solms und Klaus-Peter Wegera, Tübingen.

Ringe, Don 2006: From Proto-Indo-European to Proto-Germanic（A linguistic history of English, volume I）, Oxford University Press.

Ringe, Don and Ann Taylor 2014: The development of Old English（A linguistic history of English, volume II）, Oxford University Press.

SASS Plattdeutsche Grammatik, 2., verbesserte Auflage, herausgegeben von der Fehrs-Gilde, Gesellschaft für niederdeutsche Sprachpflege, Literatur und Sprachpolitik e.V., 2011 Neumünster.

SASS Plattdeutsches Wörterbuch, 5., überarbeitete Auflage, herausgegeben von

der Fehrs-Gilde, Gesellschaft für niederdeutsche Sprachpflege, Literatur und Sprachpolitik e.V., 2009 Neumünster.

Schützeichel, Rudolf 2006: Althochdeutsches Wörterbuch, 6., Auflage, überarbeitet und um die Glossen erweitert, Tübingen.

Seebold, Elmar 1970: Vergleichendes und etymologisches Wörterbuch der germanischen starken Verben, The Hague.

Sehrt, Edward H. 1966: Vollständiges Wörterbuch zum Heliand und zur altsächsischen Genesis, 2. durchgesehene Auflage, Göttingen.

Seip, Didrik A. 2012 [1971]: Norwegische Sprachgeschichte, bearbeitet und erweitert von Laurits Saltveit, Berlin/New York.

清水　誠　2006: 西フリジア語文法，北海道大学出版会.

Siebs, Theodor 1901: Geschichte der friesischen Sprache, in: Grundriß der germanischen Philologie, herausgegeben von Hermann Paul, Bd.1, 2. Auflage, Straßburg.

Sjölin, Bo 1969: Einführung in das Friesische, Stuttgart.

Skautrup, Peter 1968 [1944]-1970: Det danske sprogs historie, 5 bind, Gyldendalske boghandel, Nordisk forlag.

Splett, Jochen 1993: Althochdeutsches Wörterbuch, 2 Bde., Berlin/New York.

Stratmann, Francis Henry 1951 [1891]: A Middle-English dictionary, a new edition, rearranged, revised, and enlarged by Henry Bradley, Oxford University Press, London.

Streitberg, Wilhelm [4]1974: Urgermanische Grammatik, Heidelberg.

- 2000a: Die gotische Bibel, Band 1, der gotische Text und seine griechische Vorlage, 7. Auflage, Heidelberg.
- 2000b: Die gotische Bibel, Band 2, Gotisch-Griechisch-Deutsches Wörterbuch, 6. Auflage, Heidelberg.

de Tollenaere, Felicien and Randall L. Jones 1976: Word-indices and word-lists to the Gothic bible and minor fragments, Leiden.

Verwijs, Eelco en Jakob Verdam 1885-1952: Middelnederlandsch woordenboek, 9 banden en 2 suppl., The Hague.

de Vries, Jan 1977: Altnordisches etymologisches Wörterbuch, Leiden.

Wessén, Elias 2012 [1968]: Die nordischen Sprachen, deutsche Fassung der schwedischen Ausgabe von Suzanne Öhman, Berlin.

- 2012 [1970]: Schwedische Sprachgeschichte, Band 1, Laut- und Flexionslehre, deutsche Fassung der schwedischen Ausgabe von Suzanne Öhman, Berlin.

Wright, Joseph 1981 [1910]: Grammar of the Gothic language, second edition with a supplement to the grammar by O. L. Sayce, Oxford University Press.

Wright, Joseph and Elizabeth Mary Wright 1984 [1925]: Old English grammar, third edition, Oxford University Press.
Zoëga, Geir T. 1981 [1910]: A concise dictionary of Old Icelandic, Oxford.